

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 佐藤和喜

本論文は、古代和歌の歴史を主として表現史的な観点から細密に考察し、『拾遺集』がその大きな変容を準備する役割を果たしていたことを、前後の時代の和歌との丹念な比較を通じて明らかにしようと試みたものである。従来は、『古今集』『後撰集』『拾遺集』の三代集に続く『後拾遺集』をもって一つの画期とする理解が一般的であったが、本論文は『拾遺集』がすでに『後拾遺集』の変化を先取りしていたことを具体的に明らかにする。古代和歌史の研究にとって大きな意味をもつ指摘であり、この点は高く評価することができる。佐藤氏はまた『拾遺集』の研究を通じて獲得した読みの方を、他作品についても応用し、これまでとは違った作品理解の可能性のあることを指摘している。この点もまた本論文の大きな成果といえる。

本論文の全体の構成は「第一部 通時論」「第二部 共時論」「第三部 応用論」の三部からなる。「第一部 通時論」は『拾遺集』論で、本論文の中心をなす。佐藤氏の二十年余に及ぶ研究の蓄積が見事に発揮されている。『拾遺集』と『万葉集』『古今集』の重出歌を比較し、詞書をも含む表現の微妙な差異に着目することで、『拾遺集』が前代の和歌に見られた古代性を希薄化させ、新たな表現の可能性を生み出していることを明らかにする。『拾遺集』が対象との呪術的な共感性を喪っていることを、向こう側に対するこちら側重視の姿勢と見て、これを「此界性」と名づけ、さらに五七調から七五調への転換が、多声的な歌体から単声的な歌体への変化と見合う現象であることを指摘する。景と心の複合からなる和歌の基本構造が、その内実において次第に詠み手の「転位（外側から景に向き合っていた詠み手が、内側に身を転じその位置から心を表現するようになること）」を含まぬものに変化していくことを、豊富な具体例によって示す。単声化された一首は、一句から五句までが直線的につながるが、それによって時間が歌に生まれ、物語性がそこに生み出されることになる。と論ずる。きわめて斬新かつ刺激的な指摘といえる。

「第二部 共時論」は、第一部で試みた『拾遺集』と『万葉集』『古今集』の比較の方法を、同時代作品である『古事記』と『日本書紀』、『古今集』と『伊勢物語』、『後撰集』と『大和物語』との間に適用して、それぞれの差異を明らかにしたもの。ここでも、同一の歌（歌謡）が、微妙な表現の差異、あるいはそれが置かれた文脈の違いによって、表現の質を大きく異にしているこ

とが明らかにされている。

「第三部 応用論」は、第一部の方法を応用して、『紫式部集』『更級日記』の表現の特質を見極めようとしたもの。『紫式部集』と勅撰集の共通歌の比較を通じて、『紫式部集』では歌の視点が内部的で感情度が高く、勅撰集では外部的で感情度が低いことが指摘される。また『更級日記』においても、古歌等の引用の検討から、この日記が表現の深層において、『竹取物語』のかぐや姫を意識していることが明らかにされている。いずれも意欲的な内容を持ち、今後の研究に際して絶えず参看される必要のある高度な論になっている。

佐藤氏の方法の基本は、二つの作品中における同一の歌の表現の差異を丹念に探ることで、それぞれの特質を明らかにするところにあるが、一方で、その相異が微妙であるだけに、その認定に疑義が生じるような場合もなしとしない。また比較の際の判断基準がしばしば二項対立的な思考の枠組みに規制されるという不自由さも見受けられる。しかしながら、精緻な読みの積み重ねによって、古代和歌の表現史的展開を動的に跡づけた点は大いに評価されるべきであり、ややもすると表面的で平板な内容に陥りがちな古代和歌史研究の現状に一石を投じた意味はまことに大きいといえる。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。